詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems

第 22 号
2022 年 9 月

目次

伊東友乃　夏の道　2
関根全宏　死者の陰影　3
髙橋杏実　宝石　4
永松佑香　解読したとき　5
清水みほ　欺き　6
仮面　7
すっぴん　8
機嫌　10
露呈　12
千石英世　鎮魂歌2022〔完全版〕附反歌　13
渡辺信二　ひまわりをめぐる14行詩3篇　26

表紙原画　鈴木順三　「耐湿な幻想1」（表紙）
「耐湿な幻想2」（裏表紙）

夏の道

伊東友乃

いっきに呼吸をして
忘れてしまうわけにはいかないのか
この道で亡骸を運ぶ虫のこと
ちいさく粒のように光っていて
無数の乱反射
車のタイヤの跡が　ひきずりだされた重力を
これでもかとぶちまけて
もし目覚めたならば
眼はより大きく　深く
あの緑色にそよぐ水平線をとらえるだろう
それから
しずかな雲に覆われる
いったい全体どうやって
これまで生きてこられたのか
触ろうとした
わたしを制して
夏が過ぎる

死者の陰影

関根全宏

大の字に寝そべり
窓の外を眺める
すぐ隣の家の屋根がみえる
その裏側がみえる
薄汚れた雨樋と骨
その向こう側
遥か上空で
うすい雲がゆっくり動く
家にはわたしひとり
呼び声に耳をすませ
あなたをインストールする
そのまま目をとじ
死者の陰影が
わたしに満ちる
果実がひとつ
死とともに横たわる

宝石

髙橋杏実

それはまるでエメラルド
上には冷たいアイスクリームと
シロップ漬けされた赤い果実

炭酸の効いたソーダと
甘酸っぱい果実が
僕らの目を覚ます

目の前にはターコイズブルーの海
海風に揺れながら
二人で乾杯する夏の朝

「はやく飲まないと溶けちゃうよ」
朝日に照らされる君の横顔を
エメラルドが更に輝かせた

解読したとき

永松佑香

黒い鍵盤に白い鍵盤
どれも違う音なんだって
とっても不思議

白い紙に散らばった記号を
指で解読していくんだって
とっても不思議

それを解読したとき
流れる音はシンフォニー
流れる空気は衝撃

だから今日も僕は
白黒ついたその上を指で踊らせる

欺き

清水みほ

価値を与えられた
ブランド品
ブランド人
ブランド食品

価値を与える
ノーブランドの生活
ノーブランドの私
ノーブランドの光景

自分しか知らない
価値に気づいたとき
宝石を発掘したみたいで
自分だけの秘密にしたくて
百円玉を拾ったあの感覚

仮面

清水みほ

同じ世界
初めてじゃない
この感覚

何回目だろう
答えの無い
自問自答

まるで見た目だけ
誤魔化した
アボカドのよう

私は
一体何者か

すっぴん

清水みほ

気に入らないなら
隠せばいいよ
コンプレックスなら
偽装すればいいよ

そうやって毎日
本当はこっちだって
暗示をかけるの
これが素顔だって

納得した仕上がり
これで会える
弾む足取り気持ち
あなたを待つ

日常と化した
あなたとの日々

素顔と化した
わたしの偽装姿

やめられない偽装
増す偽装工程
やめたい誤魔化し
減る自己肯定

暗示が呪いへ変わる

憧れ妬み嫌悪
十人十色なんて嘘だ
「可愛い」は条件がある
他者肯定が全てだ

機嫌

清水みほ

昼過ぎの授業　窓の外を眺める
水色の空いっぱいに配置された雲
絵に描いたような空を感じる
右耳から先生の声が聞こえる
罪悪感を抱えながら
それはもはや遠くに聞こえる
五月下旬の頃

大袈裟なほどに青い空
雲なんて忘れ去られ
右耳で感じるそれと同じくらいに
鬱陶しく感じさせる太陽
窓から飛び立って
何処か行ってしまおうかと企む
もはや何かになったような感覚
八月中旬の頃

起こす気があるのか疑うほどに寒く暗い

半目ですら感じるその態度
時間だけが進んだのか朝日の寝坊なのか
知る由もない
調子が悪いのか一日を早く終わらせる
まだ沈んで良いと言っていない
十一月下旬の頃

露呈

清水みほ

目を閉じても
分かる人格知性
街に溢れる言葉

紛れ込んでも
なりすましても
見える足跡

刹那じゃなく
積み重ねの人生

〔完全版〕

鎮魂歌 2022　附反歌

千石英世

去夏葉月朔日琵琶湖畔某児童公園近傍での「児相案件」報道に接し、急遽、近江幻住庵をリモートにて訪問し、詠える

（一）翁

それではオレ、今からエアー・ギター弾きます、そして詠います
湖畔にて、というタイトルで、クルナ Covid19 の時節柄声に出すのは控えます、
〽のスタンザは、キホン声なしで、では演奏します
オレ？　お前さまがた兄妹のエアー・ジジーです、自称
まぼろし住みの翁です、ではいきます

〽オーミノミ、今日はなぜか夕波千鳥が哭きまする
Jungle
Jungle

〜オーミノミ、心もシノに涙に濡れてイニシエすらも哭きまする
Jungle
Jungle

シトドに哭きまする
Jungle
シトドシトドに哭きまする　ジャングルまでも哭きまする Jungle

Jungle　Gym　yo
Jungle　Jim　yo
〜オーミノミ、Jungle　Jim も Jungle　Gym も　yoo
オレらのヴォキャブュラリーでは Jim も Gym もジムにジム　yoo
Gym は風の塔 Jingle-
Jim は風の子 Jingle-

オーミノミ、　おおおー、オーミノミ、　おおおー、

風走るエアー・サイコロの底を這いエアー・フレームを攀じ登り
おお！　僕は、おお空を抱きしめた！
おお！　僕の妹は、おお湖を抱きしめた！

〜いまはもうキューブでシュールでナイーブに空っぽ
骰子の塔
空っぽのくせして立方体なのだ　空っぽのくせして十字架だらけだ
上からみても下からみても磔刑のダンジョン　風吹き抜ける

湖や湖面割れてゆらめきあがる夏木立

〜おおおー、オーミノミ、

ジャングル住みのジムよ、少年よ、妹よ、
こちら、エアー・ジジー、まぼろし住みの翁です　応答せよ　応答せよ
応えてよ　その声で　声のまぼろしで　このまぼろしに

〜

アチメ　オ々オ々　オ々オ々　オ々オ々　オ々オ々

（二）アイ

本作は現実に起こった事件に触発されて書かれたものであり、事件当事者並びに関係者への言及に関しては慎重を期し、とりわけ、事件当事者の人格とその尊厳の護持に関しては細心の配慮をはらうよう心掛けた。そのためにも、事件の遠い背景として濃淡さまざまに関わると想像される文化的連接、また歴史的連関についてここに自注を施す。事件はこうした連接と連関の深奥で起こったとの思い止みがたく――。また、深奥の奥の奥には注釈者自身の過去も閉塞されているとの思い絶ちがたく――。すなわち本作における鎮魂は、残された生命の更新を祈念するの意を含むものである。自注するに際し、ウェブ上の情報を参照したが、ＵＲＬは略した。

（鎮魂歌への注）

幻住庵　松尾芭蕉晩年の仮住まい跡。滋賀県大津市国分。

去夏葉月朔日　二〇二一年八月一日。

某児童公園　右幻住庵より徒歩圏に所在。

報道　のちに大津女児傷害致死事件と称される一連の報道。メディア各社の報道によれば、二〇二一年八月一日朝、右児童公園近隣の住宅で玄関チャイムが鳴り、応対に出たところ、一人の少年（当時一七歳）が立っていた。聞けば、妹が公園のジャングルジムから転落して様子がおかしい、助けてほしいとのこと。直ちに救急車が呼ばれ、妹（当時六歳）は搬送されたが、搬送先病院で死亡が確認された。こ

の後、妹の身体に不審な傷跡が見いだされたことから、事案は警察所管となり、以後、意想外の展開を示し、事案は事件となる。ジャングルジムからの転落は兄の偽証と判明。さらに明らかとなったことは、妹と兄は長きにわたりネグレクト情況の家庭環境にあって、家の中では兄ひとりが妹の面倒を見ていた。この日々に兄はいらだちをつのらせ、やがて妹に手をあげる場面が増えていく。この日の一〇日ほど前からそれは強度を増し、この日ついに妹は動かぬ姿となる。朝、動かぬ妹を抱きかかえるようにして兄は家を出、右公園を目指した。そしてジャングルジムのかたわらに、妹を置き、近隣の玄関チャイムを押したのである。偽証判明後、逮捕拘置された兄はその後家庭裁判所の審理を受けるのだが、家裁の裁定は、加害者少年においてもその不全なる養育過程を考慮せざるをえぬとし、検察送致ではなく、少年院保護の結論となった。以上は、本注釈者が各メディア報道をまとめたものであり、文責は本注釈者にある。右につづく続報、また右に先立つ予兆的「児相案件」についてはこの時期の各紙誌の記事に譲る。事件を捉えるまなざしに温度ある鋭さを示した報道として、「文春オンライン記事二〇二二年三月七日、一七日号」「中日新聞記事二〇二二年三月二七日号」がある。

エアー・ギター　ロック・ミュージックなどの音律に合わせて架空でギターをかき鳴らすこと。air guitar。わが国では二〇〇〇年代から流行し、コンクールが催されるなどしている。

オーミノミ　柿本人麻呂の万葉歌「近江のみ夕波千鳥ながなけば心もしのにいにしえおもほゆ」による。

Jungle 及び Jingle　前者は野外における児童むけ遊具ジャングルジムの原語

jungle gym による。後者は英語の名詞また動詞で、鈴や鍵束などがリンリン、ジャラジャラなる音、また、そう鳴らすこと。

yo 及び yoo　英語ヒップホップ歌謡に多用される呪文、意味は文脈により多様で不定とされるが、元の意味はともに、やあ、君たち！ Yu, all!とのこと。

夏木立　右幻住庵における松尾芭蕉の記録「幻住庵記」に見える芭蕉の句、「まずたのむ椎の木もあり夏木立」による。

アチメ　日本古代歌謡における鎮魂の呪文、意味不詳とのこと。「年中行事秘抄」による。引用「々」のしるしは国会図書館蔵同書電子書籍原文による。

（反歌への予注）

本反歌も右の事件に触発されて書かれたものである。鎮魂の所作は、私見によれば、それが共同体の共同幻想の所作と、順逆いずれであれ、かさなるときその役割を果たす。反歌が要請されると考えるゆえんである。さらに以下に自注をまた施し、事件背後に遠く揺曳するとおぼしい歴史的連想、文化的連鎖との接続を試みる。さらに副題に「能的」との字句を掲げ接続の補いとする。ただし、能作品を精確になぞるものではない。

焼き印　説経節「さんせう太夫」より。ただし、説経節の人物は兄妹ではなく姉弟。

湖　映画「山椒大夫」（溝口健二監督）より。ただし、映画では湖ではなく海。

疫病鎮静　事件の翌日二〇二一年八月二日、新型コロナウイルス対策の緊急事態

宣言は、東京、沖縄、埼玉、千葉、神奈川、大阪へと拡大される。

目に　谷崎潤一郎の小説「春琴抄」に接続。ただし、小説では、人物は兄妹ではなく、女性主人と男性従者。

土壌除染　事件の翌月二〇二一年九月一五日、茨城県美浦村村議会は、ＡＤＲで示された和解案一一万円を受け入れる方針を議決。美浦村は、人件費等二六三五万円の賠償金をＡＤＲに請求していた。ＡＤＲとは、Alternative Dispute Resolution の略で、裁判外紛争解決手続と日本語に訳され、裁判によらない紛争解決方法を広く指す。ここでは原子力損害賠償紛争解決センターのことを指すと推測される（文部科学省研究開発局原子力損害賠償紛争和解仲介室に所在）。「茨城新聞」二〇二一年九月一六日号による。

オイディプース　ギリシア悲劇「オイディプース王」より。ただし、ギリシア悲劇における父殺し、母子相姦のテーマは本作ではスルーしている。ただ一点、遺棄された子供というテーマにおいて本作は悲劇「オイディプース王」に接続する。

くるぶし　古代ギリシア語でオイディプースの名は踝の腫れた者の意がある。

風壇　ジャングルジムの比喩表現。ただし一般通有のものではない。

妻妹　本フレーズにより、兄妹の間に性的な関連が暗示されるものではない。本作におけると、また、現実事案におけるとにかかわらず、兄と妹のあいだに性的な関連は暗示されない。ただ一点、兄が親代わりに幼い妹を世話していたということ、当初、親密に世話をしていたということ、そのことから、本作では、兄にとって妹は妻的存在でありえたと、その深層心理を推し量り、本フレーズでそれを提示する。一般に、男子にとって、妹ないし姉は、幼少年期においてすでに、深層心理におい

て、また、ときに現実場面においてその存在が妻的オーラを帯びる、とは北米の作家ハーマン・メルヴィルの小説『ピエールあるいは曖昧』（一八五二年）の深説するところである。ただし、小説では、兄妹は姉弟で、かつ母と息子、両人が互いを、姉よ、弟よと呼び合う親密な関係が遂行される。母は四〇歳代後半、息子は一九歳。母の夫、すなわち息子ピエールの父は故人。

父と母　報道によれば兄妹は異父きょうだいであり、兄は幼児のころより、妹は乳児のころより、それぞれ別の施設で養育を受けており、この年四月、初めて母（当時四一歳）のもとにかえされ、同居し、三人の家族となった。しかし、母は外泊がちで、家を空けること多く、実際は兄妹の二人家族となった。

なおもって　及び　いわんや　唯円「歎異抄」より。

火垂る　野坂昭如の小説「火垂るの墓」に接続。ただし、小説では兄妹の年齢は一四歳と四歳。

西　浄土系諸宗派の説く浄土の在所。

（三）夢幻

反歌　―能的―

口に
焼き印を押す
くちびるが青みを帯びて澄みわたる
湖があらわれる
中世日本のならわし
私刑の一種にすぎない
流言蜚語の徒よ、震えよ、
これは今の世の口の掟
いま、わたくしの口は震える口

湖が燃え上がっているぞと呼ばわり、叫んで、
じつは、
未明　庭で朝顔鉢が火を噴いたにすぎない
疫病鎮静の儀式は終わっていたのだ

目に
細糸を通す
右の瞳孔にふかく一本

左の虹彩にすばやく二本
きよらかな手で
針穴にきよらかな手を通すように
異象幻視の徒よ、怯えよ、
これも私刑の一種にすぎない
近世日本のならわし
これは今の世の目の掟
いま、わたくしの目は怯える目

空が燃え上がっているぞと呼ばわり、叫んで、
じつは、
夜明け　猫が二本足で踊り始めたにすぎない
土壌除染の祈願は終わっていたのだ

耳を
棒で押す
左耳から右へ鉄製の棒で
右耳から左へ銅製の棒で
水平に
風の道に
出会うまで

愛染無法のははたちよ、ちちたちよ、
耳をさすっておののけ
これも私刑の一種にすぎない
近代日本のならわし
これが今の世の耳の掟
いま、わたくしの右耳は押されてでてくる左耳

不可逆の磁力が肌身をめぐりはじめたとささやき
不可触の気流が身肌をあらいはじめたとつぶやく
だが、そのときは真昼、
肉二柱がシーツの上で肉の息をしていたにすぎない

目覚めれば　真昼の果て
斎戒断食による告解の節会は終わっていたのだ
犠牲のくるぶしはひび割れていたのだ

王よ、オイディプースよ、くるぶしひび割れし者よ、
妹の亡骸を妻のごとくに抱き運びたる少年王よ、
風の道に捨てられし孤児王よ、
次の世の烈王たるべき若王よ、

供養の風壇に亡き妻妹を置き、
父と母の名を呼ばわれ、叫べ、
空へ、湖へ、

しらず、しらず、われわがははをしらず、
しらず、しらず、われわがちちをしらず、
なおもって、われだれであるかを、
いわんや、わが抱く妻妹を、
ましてや、空、湖を、
わがまなかいにあふれでる闇のうれしさ

だが
かすかに寄せてはかえす未生の時の音楽
くるぶしを濡らしささやくに
西へ、
と、

西は右？
左が西か？
風は止む
今は夜か？

今は凪のとき　たそがれのとき　啼く鳥のとき

〔ここより地謡、合わせて兄妹の相舞、橋懸りから幕へ、鏡の間へ〕
そう　そこを右へ　そう
つぎを左へ　そう
濡れた石垣を指さきにうすくたどって
そう　そのまま
坂を下ればもと来た風の道に出ますから
そしたら大きな湖に出ますから
足もとに気を付けておゆきなさい
そしたら大きな空の下に出ますから
そしたらもう夜だから
裳すそに火垂るが飛び交う夜だから
そのまま夜空の中をおゆきなさい
夜の奥が西だから

（読者へ　本作の（一）は、ほぼ同文で『現代詩手帖』二〇二二年三月号に発表したものである。ここに（二）と（三）を加え「鎮魂歌 2022」の完全版としたい。）

ひまわりをめぐる14行詩 3篇

渡辺信二

1

太陽を求めたおまえは
今　太陽に代わって
訪れる虫に　光ひとかけらを与え
蝶には　光ひとしずくを与える

見つめる人に曝け出すのは
満ち足りた内面が
外へと　柔らかく溢れ出る様
惜しげなく　光を返す

いつか　言葉を発しない
黄色い何千もの舌片が
日の出の方角へ向って　何かを叫ぶ
その凝縮を遮るものは　鳥さえも許さない

ついには　小さな無数の種となり
黒く固まり　美しい数列を作る

2

今　おまえの求める太陽に
正義はあるか

例えばロシアとウクライナと
共におまえを国花としたが

不倶戴天　同じ太陽を仰がず
南風吹けば　北へ香りを伝え

東風吹かば　西へ匂いを送る
みずから　無数の太陽となって

世界に　命の叫びを伝えられるのか
それとも　うろたえて　太陽を見失うのか

おまえの一面に広がる光景が
たくさんの人びとを驚嘆させてきた

その黄金の輝きの
今は　なんと　われらと関わらないことか

3

いつか　おまえを　ひまわりよ
おまえを　失うことがあるのなら
おれたち　生きることができるだろうか

いつか　朝日が　激しい陽射しをもたらし
一日で　おまえを枯らす
重苦しい空気のなか

おれたち　いつか　歌をうたえるか
不安と恐怖に苛まれ
見渡すべきおまえの姿がなくて

おれたち　おまえを嘆き
気が狂う　空を見つめて
おれたち　大声で叫ぶ

それが　じぶんを求めることだと知らずに
おれたち　なおも　おまえを求め続ける

寄贈詩誌・詩集等は下記『立彩』編集室宛てにご送付をお願いできれば幸いです。

〒173-8602
東京都板橋区加賀 1-18-1
東京家政大学人文学部　関根全宏研究室気付

2022 年 4 月 1 日以降に贈られた詩誌等一覧

詩誌

『白亜紀』163 号。
『りんごの木』59 号、60 号、61 号。
『コールサック』109 号。

歌集

林宏匡『ニムオロのうた』（第一歌集文庫）現代短歌社、2022 年。

詩集

太原千佳子『デイジイ・ブック』土曜美術社出版販売、2022 年。
武子和幸『モイライの眼差し』土曜美術社出版販売、2020 年。

その他書籍・論文・エッセイなど

日本ヘミングウェイ協会編『ヘミングウェイ批評：三〇年の航跡』小鳥遊書房、2022 年。
――『ヘミングウェイ批評：新世紀の羅針盤』小鳥遊書房、2022 年。

詩誌『立彩』第 22 号　2022 年 9 月 20 日発行
頒価 300 円
編集発行 「立彩」
〒173-8602　東京都板橋区加賀 1-18-1
東京家政大学人文学部　関根全宏研究室気付
印刷　株式会社 DTP 出版　TEL 03-5621-4531